

ロンドンのエコロジーパーク(生態園) III

土 田 勝 義

信州大学農学部森林科学科

The Ecology Parks in London III

Katsuyoshi TSUCHIDA

Department of Forest Science, Faculty of Agriculture, Shinshu University.

Key words: Nature Reserve, Corridor, Botanical Garden, Museum, Ecological Garden

はじめに

ロンドンのエコロジーパークについては、すでに二報(土田:1994,1995)で報告した。ロンドンではエコロジーパークあるいはそれに類した施設は、入手したいくつかの資料によると100ヶ所近くはあると思われる。数が正確に把握できないのは、所有あるいは管理している団体が、ロンドンの自然保護管理・計画を担当する公的なロンドン・エコロジーユニット(ロンドン生態局)が把握できない、管轄が異なる(教育や観光、厚生部門など)もの、あるいは地域の市民団体、自治体などで管理しているものがあるからである。既報のようにロンドン・エコロジーユニットは、掌握しているエコロジーパークのリストを示している。またロンドン最大の民間自然保護団体のロンドン・ワイルドライフトラストでは、52ヶ所の施設をリストアップしている(London Wildlife Trust:発行年不記載)。既報ではロンドンの代表的なエコロジーパークの紹介を行ったが、1995年の訪問では、既報と少し異なるタイプのエコロジーパークの調査ができたので報告したい。本報では、ほとんど放置されているかなり自然度の高いもの、川岸にそったものといった、対象が今までと異なるタイプの生態園と、博物館、植物園などで新たに造営した生態園の事例について報告したい。

エコロジーパークの事例

5. フォックスウッド自然保護区(Fox Wood Nature Reserve)

ロンドンの西部にあり、地下鉄でロンドン中心地から約30分程度の Hanger Smith 駅で下車し、徒歩10分



写真-1 フォックスウッド自然保護区の入口

程度の Hanger Hill という丘の一角にある。周囲は住宅地で中規模な都市公園である Hanger Hill Park(ゴルフ場もある)に隣接している。現地は段丘状の地形の斜面にあり、上の平坦面は運動場に利用されている。その斜面地形に樹林が残されており、名前のとおり自然保護区に指定されている。看板によるとロンドン・ワイルドライフトラストが管理している(写真-1)。外見からすると全体として二次林で、樹木の太さは10-15cmと細い。主な構成種はハンバミで、ツタが絡まっている。小さな門を入ると、数本の遊歩道があり、少し歩くと外見とはちがって、トチノキ、カエデ、カンなどの大木が茂り、鬱蒼としてくる。これらの太さは50-100cm、高さは20mに達する。林床もこれらの稚樹や低木類が茂り、自然林の雰囲気となっている。野鳥もたくさん姿や鳴き声があり、リスなどの小動物も棲息している気配である。保護区の広さは約1ha程度と広くはないが、林内を散歩するには手頃な広さであろう(20分くらいで一回り)。9月下旬なの

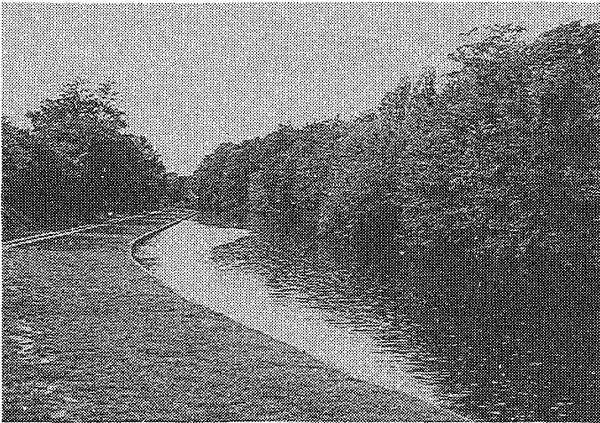


写真 - 2 グランドユニオンカナルの岸辺

で、カシの実の落ちる音が頻繁に聞こえた。ここは案内板や施設はないが、歩道が張り巡らされており、訪問者が適当に選択して歩けばよい。周辺は芝地や公園、住宅地で、緑はあるが、人工的な環境の中で、孤島のように森林が残存されている。本来なら開発により消失しているはずであるが、残存しているのは関係者の努力によるものと思われる。当地の自然植生の保存や、野生動物の生息地として貴重な自然であり、存続がはかられている。

6. グランドユニオンカナル自然保護区 (Ground Union Canal Nature Reserve)

前区よりややロンドン中心地よりの地下鉄駅 Ladbroke Grove で下車し、北へ向かって1kmくらい歩くと、運河にさしかかる。この運河の川岸がグランドユニオンカナル自然保護区である。運河にかかる橋のたもとから、低い岸辺にそって緑地が続いている。運河は幅15m程度で、水量は豊かである。この岸辺は長さ約kmにわたって幅5—10mくらいで運河に沿って続いており、水辺近くは草地、境界は疎林となっている(写真-2)。疎林の外側は農地や工場の敷地となっている。また対岸は大きな墓地公園となっている。自然保護区というからには原始的な自然が少しはあるかと思ったが、そういう状況ではなく、運河の造成された岸辺に緑地帯をつくり、保全しているという状況である。植物的自然は貧弱ではあるが、運河にはかなりの野生の水鳥が棲息したり、飛来していた。また対岸の墓地公園から水辺にリスが姿を現していた。岸辺に沿って公園の末端まで約kmを歩いたが、水鳥にとっては静かで広い水面である。ここはいわゆるコリドー (Corridor: 回廊) といわれる公園で、市街地にあって長い帯状の緑地帯であり、前報の Wookland Park と同じタイプのエコロジーパークである。ただしここは水辺という点で異なっている。運河にはヨシなどの

水生植物がみられ、主として水鳥の生息地の確保という点で意味がある公園である。途中、岸辺に小公園があり、小さな池や樹林が造成されていたが、いわゆるビオトープ的なものである。その他の施設はなく、散歩道あるいは水鳥の観察道路として利用されている。

7. 自然史博物館のワイルドライフ園 (Wildlife Garden of Natural History Museum)

有名なロンドンの自然史博物館は、ロンドン中心地の南西の一角、ケンジントン公園の南にある。ここは大英博物館の自然部門を切り離して作られた博物館で、宮殿のような建物に圧倒される。一昨年訪問した際はなかったが、昨年敷地内にワイルドライフガーデン (野生園) が造営された。七月に完成したという。この野生園は、博物館の正面玄関に向かって左手にあり、大きな木立に囲まれている。門は常時閉ざされており、後述する場合にのみ入場できる。博物館の受付で尋ねると、博物館の入場料を払えばガイドがついた案内をしてくれるということであった。園内のガイドツアーは、12時と3時の二回で、一周約30分である。当日は希望者がなく、筆者一人で案内をもらった。一般客は上記の方法で園内に入場できるが、ここはむしろ学校などの自然観察の学習施設として活用されており、その場合は無料でいつでも利用可能であるという。

野生園は広さは約50×50m程度で、周囲はトチノキの大木の木立で、その開けた空間に新しく造成されたものである。まず、林床には、当地の野生植物の種子を蒔いたり、苗を植え、自然の植生を復元しようとしている。またシダ類、キノコ類などを枯木に生やした

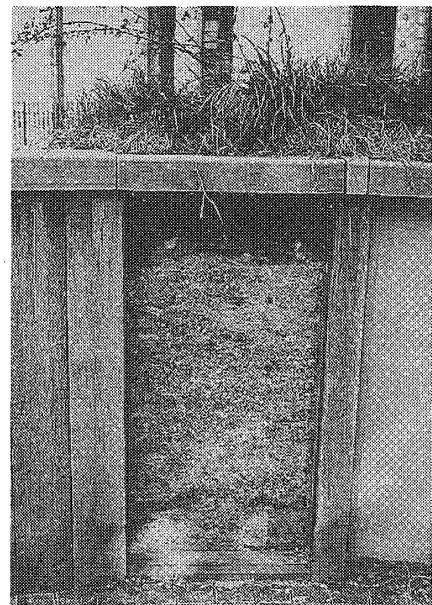


写真 - 3 透明板で土壌の構造を示す

りして、自然の構造をみせている。歩道は自然石を敷いて地質の復元をはかる。高さ1mほどの小丘をつくり、その断面を透明板で仕切って、土壌の階層構造が見られるようになっている(写真-3)。明るい空間では、野生草種によるワイルドフラワーガーデンの区域があり、秋の可愛い草花が咲き乱れていた。直径10mほどの池が2ヶ所あり、水路もあって、水辺や水中の動植物が観察される(写真-4)。このようにここの野生園は、森林、草原、水辺などいくつかのミニチュアの自然を造成し、野生あるいは自然の仕組みや、成り立ちを学習する場として造成され、また利用されている。利用者は児童を主とし、観察帳やテキ

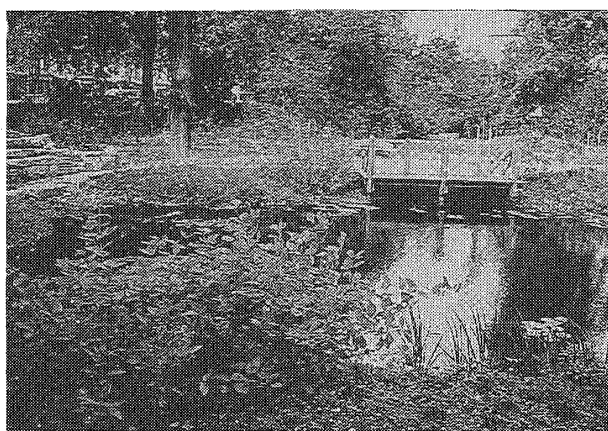


写真-4 ワイルドガーデンの池

ストを利用しながら都市での自然観察と学習をはかろうとしているのが特徴的である。なおそのためにいろいろなアイデアが取り込まれ、いわゆるエコデザインが活用されている。またかなりの費用がかかっているようである。

博物館はその名の通り、標本など死んだ自然を対象とした展示、研究、学習施設だが、生きた自然も学んだりする場としてこれからは対応すべきである。その点、日本ではそのような理念のもとに作られた生態園を持つ千葉県立郷土博物館は先進的であり、これからの博物館を先取りしている。

8. エジンバラ植物園のエコロジカルガーデン (Ecological Garden of Royal Botanic Garden Edinburgh)

イギリスにはどの都市に行っても立派な植物園がある。ロンドンでは世界最大といわれるキュー植物園がある。今回もキュー植物園、オックスフォード植物園、エジンバラ植物園など数ヶ所を訪問したが、これらの植物園の多くは、一般的な植物園すなわち、広大な土地をもち、大体3エリアの構成となっている。一つは

特徴ある植物を植栽したり、また分類群毎に植え込みを作って生きた植物の見本園的な区域、色々な樹木を植栽した樹林地域、高山植物園やヒース園などの群落区域、池や水辺の植物区域、温室区域といった、植物園本来のエリアと、人々が憩う公園エリア(広々とした芝生や木立、池など)、さらにハーバリウムなどの研究施設エリアである。これらは我々が羨ましくなるほど立派な施設であるが、しかし自然植物園というような野生的な部分はなかった。もちろん植物園は上記の目的で造営されたものであり、その役割はあるが、最近の環境保護、自然保護の声が高まる中で、植物園にもそれにそった施設の必要性をもつようになったし、またもっともそれに適した施設である。筆者が知る限りでは、イギリスの植物園に自然園的なものを作っている例は知らない。もちろんキューやオックスフォード植物園にもなかったが、エジンバラ植物園の一角にエコロジカルガーデンとして、存在していたのに驚いた次第である。ロンドンではないが、そのような好例として、ロンドンから遠く離れたスコットランドの首都エジンバラの植物園のエコロジーガーデンを紹介する。

エジンバラ植物園は、エジンバラ市の北部の郊外にある広大な植物園(27ha)であり、ブータンや昆明の世界的な植物研究で知られている。その研究や施設の説明は省略して(スコットランドの植物的自然の重要な研究もされている)、この植物園の北西の片隅に、最近エコロジーガーデンという名の施設が造営された(写真-5)。スタッフの話によると、自然の状態を再現して、自然の中での植物や他の生物の生活や、さまざまな関係を知ることは重要なことで、植物園でも最近このことに気づき、エコロジーガーデンを作ったということである。なお実際にはまだ造成中で、一部の使用であった。色々な郷土の樹木や草花が植栽され、

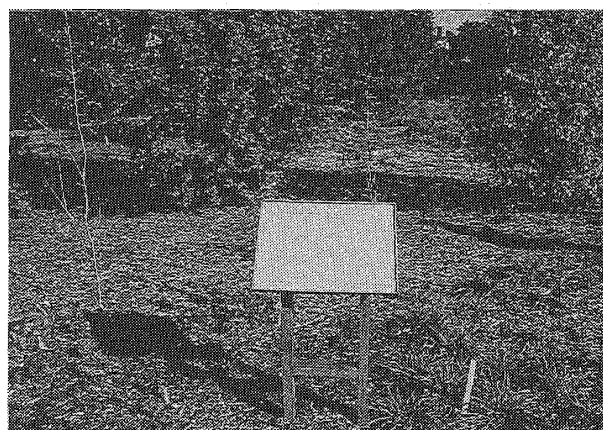


写真-5 エジンバラ植物園の生態園の入口



写真-6 植物園を訪れた児童

林や草地を造成し、枯木をおいてキノコを生やしたり、いろいろな仕掛けで自然の復元（現状では偽自然の造成）をはかっている。ここでももちろん子供の自然学習の場として活用されており、エジンバラ市の学校からときおり先生に連れられて、生徒が観察にくるということである（写真-6）。それらの様子をみながらさらに改善を加えていきたいということで、植物園にこのような施設を作ったことを自慢していた。

ま と め

以上、今回も数ヶ所のエコロジープーク（エコロジージャーデン）を紹介したが、特徴としては、フォックスウッドのように比較的自然度の高い郷土の森といったものをエコロジープークとして保全し、かつ利用されているもので、名前に自然保護区となっているが、実際は立ち入り等自由（犬の散歩もかまわない）に利用されている。出来たらその名の通り完全な保護区としておきたいものもあるが、ロンドンではそのような保護区はないようで、すべてがいわゆるパークあるいはガーデンとして公共的に利用されている。自然保護区の意味は、基本的にそのままの状態にしておく公園であり、都市公園のように徹底した管理をしない公園という意味である。ただ共通していることは、立ち入りや散歩などは可能であり、動植物の採取や、環境破壊などは不可というものである。たとえ都市の中に優れた自然地域があっても、それを保全することは非常に困難である。所有者、周辺の理解が必要であり、また管理も重要である。そのため、完全保護区とせず、都市のような市街地の動物の生息地としては、ある広さを確保できない場合、線状あるいは帯状の形で一定

の生息地あるいは移動ルートを確保することができる。すなわちコリドーとよばれるものである。そのよい例が、グランドユニオンカナルのエコロジープークである。ここは水鳥や動物のコリドーとして、河川沿いや道路沿い、あるいは街路樹、屋敷林などの連続的環境を活用している。都市のような広い面積を確保できない地域では生物の生息環境を維持したり、造成したりするための一つの方策である。

博物館や植物園、動物園などの施設に、エコロジープーク的なものを設置するのは重要な意味がある。それらは従来の目的もあるだろうが、現代的な社会的ニーズ、教育的ニーズに対応していくことは必要である。また、自然や生態系の仕組みを見せたり学ばせる生きた施設は、住民や生徒にたいして、地域や地球の環境保全を推進していく教育的な施設としてもっとも価値があり、適した場所である。自然史博物館やエジンバラ植物園の試みは意義あるものであり、日本でも普及することを望みたい（千葉県立郷土博物館を参考にするとよい）。なおこれらの施設の造営にあたっては、その理念、設計、デザイン、施工において、生態学の専門家の協力を得ることである。えてして似て非なるものを作る可能性がある。またその管理や活用に関しても同様であるが、とくに専門の教育者による教育指導、あるいは教育者の養成も必要である。上記の施設にそのような部門の充実を望みたい。

以上3回にわたってイギリスのロンドン（一部他所）のエコロジープークを紹介してきたが、なにも画一的なものでなく、その地域、対象とするもの、利用方法、管理方法などどんな形でもいい。基本的に都市あるいは近郊において、自然地域の確保をし、その保全をはかること、そのための方法としては、利用も含めた総合的な理念とプランをたてて、地元住民、市民、行政、企業などが連帯して対応していくことが必要である。まず各自が地元でアクションを起こすことである。

文 献

- 土田勝義：1994. ロンドンのエコロジープーク（生態園）信州大学環境科学年報 16, 59-63.
土田勝義：1995. ロンドンのエコロジープークⅡ同17, 33-36.

（受付 1996年1月31日）